

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2024年1月26日

春よ来い

穏やかな冬晴れとともに2024年がやって来ました。新年のあいさつをするにはやや時機を逸してしまった感がありますが、生徒諸君はどのように新年を迎えたのでしょうか？

元日、能登半島を震源とする震度7の大地震が北陸地方を襲いました。広範囲で家屋が倒壊し、それに続く火災が被害を拡大しました。230名を超える尊い人命が失われ、多くの住民の方々が現在も先の見えない避難生活を送っています。亡くなられた方々に哀悼の意を捧げるとともに、被害にあった方々には心からお見舞いを申し上げます。

先日、偕楽園にジョギングに出かけました。偕楽園表門から千波湖へと続くつづら折れの坂道を下りると、欄干に「偕楽橋」と銘のある陸橋に出ます。この橋のたもとに紅梅の古木があるのですが、南斜面に面したこの紅梅は、毎年、偕楽園のどの梅よりも早く花を咲かせます。ジョギングの足を止めて眺めると、可憐な薄紅の花がすでに三分咲きほどに青空に映えて咲き匂っていました。一足早い春を感じたひとときでした。

冬来たりなば春遠からじ。能登半島地震の被災者の皆さまに、一日も早く安心して暮らせる春が訪れることを祈ります。高校3年生諸君にとっては、大学受験がいよいよ大詰めを迎えます。これまでの自分の努力を信じ、培った力を遺憾なく発揮してください。高3生諸君に喜びの春がやって来ますように。そして、すべての茨高生、茨中生諸君にとって、2024年が、春の生命の芽吹きのような、健やかで豊かな成長につながる一年となることを願っています。

井戸の茶碗

昨年11月、芸術鑑賞会で学校寄席を実施しました。ザ・ヒロサワ・シティ会館大ホールを会場に、本校の中学生と高校生、約1200名が落語を楽しみました。古今亭菊之丞師匠の「死神」、本当によかったなあ～。CDや動画で視聴する落語もちろんおもしろいのですが、実際の高座には本物だけが持つ一期一会の空気感がありますね。寄席の途中、筆者はときどき観客席を振り返って見ていたのですが、生徒諸君が噺（はなし）に引き込まれ、舞台上に釘付けになっている様子が伝わってきました。終了後に菊之丞師匠や「落語講座」を担当した三遊亭兼太郎さんと少しお話する時間がありました。兼太郎さんは「私たちが今まで色々な学校に呼ばれましたけど、こんなに反応が良くてウケる学校も珍しいですね～」と感心していました（笑）。

落語は江戸時代中期、戦乱のない平和な時代を背景に江戸や大坂といった大都市に人口が集中し、さまざまな大衆文化が花開く中、庶民の娯楽として誕生しました。古くは「落とし噺」と呼ばれた落語は、一人の演者が何人もの登場人物を演じ分けて物語が進行していきます。落語には、芝居や映画のようなセットや衣装、照明や音楽はありません。すべては、演者である落語家さんのことば、仕草、表情によって表現されます。観客は、演者のことばや表情から、乱暴者の熊さん、八つつあん、物知り自慢のご隠居や、遊び好きの若旦那、お金のためならウソも売り物の遊女たち、ちょっと足りない与太郎など、実際にはその場にいない人物を思い浮かべ、物語の世界を体感します。そういう意味で落語とは、表現者の芸と受け手の想像力が一体となって成立する芸術といえるでしょう。

落語の中でも、江戸時代や明治時代に作られ、多くの噺家によって繰り返されてきた噺を古典落語と呼び、その後誕生した創作落語と区別するのが一般です。落語というと、滑稽な笑い話というイメージがあるかもしれませんが、実際にはホロリとさせる人情話や有名な芝居をモチーフにした話、幽霊が登場する怪談まで多種多様な噺があります。今回はそんな古典落語の中から『井戸の茶碗』という噺を紹介したいと思います。

江戸時代、「くず屋」という職業がありました。家々を訪れ、不用になった古紙や古着、古道具などを買い取り、再生処理業者や古物商に売るという商売。今で言うところの、リサイクル回収業者です。江戸は麻布あざぶみょうがたに茗荷谷に住むくず屋の清兵衛（せいべい）、嘘や曲がったことが大嫌いで、人からは「正直清兵衛」とあだ名されています。同じくず屋でも、他人に損をさせ自分だけ儲かもうるのが嫌だからという理由で、古道具類はあつかわず、くずのみをあつかって商売するという徹底ぶりです。

ある日清兵衛が「くずう〜い」と、いつもの売り声で流していると、「あの、くず屋さん」と、貧しい身なりの、しかしどこか品のある美しい娘に呼び止められます。案内された粗末な長屋には、娘の父親、千代田ト斎（ちよだぼくさい）が待っていました。うらぶれてはいるものの、人品卑しからぬ風体、かつては武士としてある藩に仕えていたが現在は浪人の身の上というト斎は、先祖伝来の古びた仏像を持ち出して、清兵衛に二百文で買ってほしいと頼みます。普段なら紙くず以外は断る清兵衛でしたが、親子のあまりの貧しさに同情し、「儲けが出たら、必ず半分お届けにあがります」と約束して仏像を二百文で預かります。

背負いかごに仏像を入れた清兵衛が細川屋敷の窓下を通りかかると、さっそく「これこれ、くず屋。その仏像を見せろ」と声がかかります。声の主は細川家に仕える高木佐久左右衛門（たかぎさくざえもん）、まだ独り身の若侍で、中間（注1）とふたり暮らしです。仏像をたいそう気に入った佐久左右衛門は、三百文で買い取ります。

それにしても古ぼけた仏像、佐久左右衛門がぬるま湯にひたした布で磨いていると、仏像の台紙が破れて中からゴトリと包みがこぼれ落ちました。包みを開くとそこに現れたのは、何と小判五十両という大金です。「自分は仏像は買ったが、小判を買った覚えはない。仏像まで手放すからには、売り主にはよほどの事情があったのだろう。何とかこの小判を持ち主に返したい」佐久左右衛門は清兵衛を探して事情を話し、小判をト斎のもとに届けるよう頼みます。「へえ、承知いたしました。千代田様もきっとお喜びになりますよ」清兵衛も勇んでト斎の長屋に向かいます。

ところが、小判を前にしたト斎は厳しい表情で「わしは、この金は受け取れぬ」と、小判を佐久左衛門に返すよう、清兵衛に命じます。「あの小判は、先祖が非常の折にとに仏像に入れておいてくれたのだろう。それを気づかず売ってしまったのは、わしの不徳。売ったからには、もうこの金は自分のものではない。受け取るわけには参らぬ」何とか説得しようとする清兵衛のことばにも、頑として首を縦に振りません。受け取るようしつこく勧めると、「無礼者！手打ちにするぞ！」と怒り出したト斎に驚き、清兵衛は小判を持って逃げ出します。

互いに小判の受け取りを拒むト斎と佐久左衛門の間を行ったり来たりし、ほとんど困り果てた清兵衛は、ト斎の住む長屋の大家おおやに相談します。話を聞いた大家は両者を取り持ち、五十両のうち十両は手間賃として清兵衛にやり、残り四十両を佐久左右衛門とト斎が二十両ずつ分けてはどうかと口をききます。佐久左右衛門は承知しますが、なおも受け取りを渋るト斎に、大家は「それならお金と引換えに、何か品物を高木様にお贈りになったらいかがでしょうか？どんなものでもよろしゅうございますから」と提案し、それではと、ト斎は二十両のかたに、普段湯茶を飲んでいる古い茶碗を佐久左衛門に贈り、小判問題はひとまず決着をみるのでした。

このト斎と佐久左衛門の一件は細川家の家中かちゆうでうわさとなり、やがて細川のお殿様の耳にも入ります。「千代田ト斎も立派だが、高木佐久左衛門もあっぱれ。そんな家臣が我が家中にいるのならばぜひ会ってみたい」ということになり、佐久左衛門は殿様にお目通りを許されます。殿様の御前で、これが千代田殿からいただいた茶碗です、と佐久左衛門が差し出した茶碗を見て、たまさかその場に居合わせた細川家お抱えの目利き商人の目つきが変わります。「殿様、この茶碗、世に二つの（注2）名器といわれる井戸の茶碗でございます！」茶碗は細川の殿様に献上され、代わりに佐久左衛門には三百両という金子きんすが下賜されることとなるのです。

さて、三百両を前にして、佐久左衛門はすっかり困ってしまいました。もとはといえば、茶碗は千代田ト斎のところから出た物、独り占めするわけにはいきません。佐久左衛門は清兵衛を呼び、百五十両は自分がもらうから、残りの百五十両をト斎に届けてほしいと頼みます。「冗談じゃねえ！あっしはこの前、五十両で危うく斬られそうになったんだ。百五十両なんて持って行ったら、大砲で撃たれる！」と嫌がる清兵衛を何とかなだめ、佐久左衛門は金を届けさせます。

清兵衛の話を聞いて怒り狂うかと思われたト斎ですが、意外なことにじっと考え込んでしまいます。そして清兵衛に、高木佐久左右衛門殿にはご新造（注3）はおありかと尋ねます。「わしはうそや曲がったことが大嫌い。しかし、高木様もこの上なく正直な方とお見受けする。わしには年頃の娘が一人いるが、できることなら高木様のような立派な方に嫁がせたい。高木様が娘を嫁にもらってくれるなら、百五十両は支度金として受け取ろう」それを聞いた清兵衛は「そりゃいい話じゃありませんか！もらってくれるか？あんなきれいなお嬢さんですよ、もらうに決まっていますよ。あちらがもらわないならあっしがもらう！」と喜び勇んで佐久左衛門のもとを訪れます。

佐久左右衛門は清兵衛の話を聞き、「千代田殿のような立派な方の娘御ならまちがいあるまい」と、会ったこともない娘との結婚を承諾します。「ところで、」と佐久左右衛門。「娘御は…、その、どのような器量じゃ？」清兵衛は「そりゃあ、いい女ですよ。あっ

しが嫁にもraitたいぐらい。今は貧乏暮らしでくすぶってますが、ここで磨けば大した美人になりますよ！」。すると佐久左右衛門、「いや、磨くのはよそう。また小判が出るといけない」

登場人物全員がもれなく善人、直球ど真ん中のハッピーエンド。聞き終えた後に、清涼感さえ覚える嘶です。

2023年も、様々なうそや不正が世間を騒がせました。大手中古車販売会社による保険金の不正請求や自動車メーカーによる衝突試験データの虚偽申請は記憶に新しいところです。新型コロナ給付金の不正受給の報道も後を絶ちません。こうしたニュースに触れるたび、うそや不正があたりまえのようにまかり通る大人の世界を、子どもたちはどんな気持ちで見ているのだろうと、とても気になります。

昨今の風潮として、物事を「損か得か」で判断する傾向が強まっている気がします。多少のズルをしても、結果として利益を得るのが賢い人で、ばか正直に行動して損をするのは、融通の利かない愚かな人、という考え方が、いつのまにか私たちの心の中に忍び込んではいけないでしょうか？

日本には古くから、清貧^{せいひん}を美德とする価値観が存在しました。清貧ということば自体、現代では死語に近いかもしれません。しかし、モノやカネに振り回されず、正しいことは正しい、間違っていることは間違っていると、心清く穏やかに生きるなら、それは幸福と呼べるのではないかと思います。

嘘は人を卑屈にします。嘘を隠すために嘘を重ね、嘘が露見することを恐れなければなりません。正直さは、それ自体が一つの強さです。ありのまま正直であることは、時として何事にも揺るがない大きな自信につながります。誰しもが清兵衛や千代田ト斎のような生き方ができるわけではありません。自分の弱さや過ちを正直に認めるのには勇気がいります。しかし、このような時代だからこそ、「正しさ」の価値を見つめ直してみるの意味があるのではないか？ 2024年の年明け、故古今亭志ん朝さんの『井戸の茶碗』を聞きながら、ふとそんなことを考えました。

注1)「中間(ちゅうげん)」。江戸時代、武士に仕えて雑用を行った奉公人。

注2)「世に二つの」。世に二つと無い、の意味。

注3)「新造(しんぞう・しんぞ)」。武家の若い妻のこと。新造船に乗って嫁入りすることから、この名がある。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。